

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 CELIK Isil Ezgi

論 文 題 目

A Critical Perspective on Art Brut Within a Deleuzian Context

(ドゥルーズの思想に照らし合わせたアール・ブリュットをめぐる批判的視点)

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 東村 岳史

委員 名古屋大学 教授 伊東 早苗

委員 名古屋大学 教授 西川由紀子

委員 名古屋大学 名誉教授 越智 和弘

論文審査の結果の要旨

1. 本論文の構成と概要

本論文は、アール・ブリュットと呼ばれる 20 世紀半ばに登場した芸術形態と社会との関係を問う研究である。アール・ブリュットは、フランスの芸術家ジャン・デュビュッフェの用語で、かれはそれを、既存の美術制度の外部にいる、芸術的な専門教育を受けていない人びとの手による「生の芸術」(raw art) と規定した。その登場は、コンセプチュアル・アートが久しく陥った近代的袋小路から抜け出す新たな可能性を示すものとして、大きな注目を浴びた。デュビュッフェは、アール・ブリュットの真骨頂を、作品が、芸術的シーンや一般社会とはかけ離れた位置にいる人間によって創造されていることにみいだした。このかけ離れた位置が、往々にして精神障害を負う人びとと関連していたことが、やがてこの芸術形態がはらむ問題を複雑化することになった。デュビュッフェ自身は、アール・ブリュットを精神障害者が生み出す芸術と限定することに、終始反対する立場をとった。にもかかわらず、以降アール・ブリュットを狂気の芸術、すなわち精神障害者が生み出す作品とみなす一般認識が社会に広まってしまったことが、デュビュッフェによる発見から 70 年余りがたつたいまなお、アール・ブリュットを定義し直し、新たな評価基準を作り出そうとする数多くの論争や研究がなされつつあることの要因をなしている。

こうした流れのなかで、本論文がもつ革新性は、アール・ブリュットの起源と変遷の歴史を丁寧にたどりつつも、そこからアール・ブリュットが日本においてみせた特異な受容形態、すなわち社会福祉の分野と密接に結び付いて展開したという、西洋には例を見ない現象に焦点を当てていることにみいだせる。さらにその研究方法は、アール・ブリュットの日本的受容を理解するうえで、近代資本主義を西洋哲学の観点からのみならず、東洋思想を取り込むことで批判的に超克しようとしたジル・ドゥルーズの考えが適切に作用することを示したうえで、日本におけるアール・ブリュットのさまざまな実践現場に赴き、関係者から直接聞き取り調査を行うことで、アール・ブリュットの日本的受容がはらむ可能性と問題性を、西洋人の視点からみても理解可能なものにすべく、理論と実践の両面から浮き彫りにしている点で、極めて創造性に富んだものと認められる。

本論文は全 7 章からなる。第 1 章は研究課題を設定し、視点や研究方法について説明する。長きにわたり概念を感覚の上位に位置づけてきた西洋思想の伝統の影響から、芸術の領域も、コンセプトを感覚的経験に勝るものとみなす傾向を、とりわけ近代以降強めてきた。こうした姿勢に対し、概念化を逃れる他者的感覚の重要性が認識され始めるのは、現象学からポストモダン思想にかけて、西洋近代そのものへの疑念が提示されてからのことである。そうしたなかアール・ブリュットは、西洋の価値により概念化するものの領域外にある感覚を提示する格好の現象として注目された。以上の理由から、アール・ブリュットを対象とする研究には、思想と芸術を領域横断的とらえる視点が不可欠となることが、本論文の研究課題として設定される。アール・ブリュットの日本における受容形態に焦点を当てる視点から研究課題を実践するうえで、ドゥルーズの思想を中心に据えた人文学的分析に、日本における複数の展覧会やトークイベントの主催、ギャラリー、芸術家、福祉機関の関係者などへのインタビューといった社会科学的なフィールドワークをフィードバックさせる研究方法が説明される。

第 2 章は先行研究のレビューで、アール・ブリュットがヨーロッパからアメリカ、そして日本へと移植される過程で、その概念の意味も変遷し、統一的な把握が妨げられている現状が既存の個別研究を元に概説される。フランス人によって規定されたアール・ブリュットが、英語圏に「アウトサイダー・

論文審査の結果の要旨

アート」として紹介されたことにより、作品そのものもつ、概念化を逃れる生々しさや荒々しさよりも、作品を生みだすクリエイターの社会的外在性に注目が集まるようになった。精神障害をもつものによる芸術という独自の消費市場が形成されるなか、アール・ブリュットとはそもそも何かについて、混乱が生じ、激しい論争が闘わされるなか、20世紀末にはこの芸術形態が、西洋以外の地域にも波及していく。とりわけ日本における受容は、もっぱら精神障害をもつものを、芸術を通し社会のなかに取り込む福祉政策としての形態をとったため、その成果が西洋から注目を集めた。しかしそれはまた、アール・ブリュットの概念規定に、さらなる混乱の拍車をかけることにもなった。

第3章は研究の理論的基盤をなすドゥルーズの哲学についての考察である。統合失調症的（スキゾフレニック）な対象という概念を核に、アール・ブリュットを固定的な形態としてではなく、善か悪かの道徳的判断の彼岸におくという、東洋思想の影響から生まれた「反-実現」(counter-actualization)の実現としてとらえることで、アール・ブリュットの解放的な可能性が浮上するという議論が展開される。ドゥルーズは、概念規定しうるものしか認識しようとしただけでなく、概念化しえないものを西洋人にとって認識可能な枠内に無理矢理押し込めてきた西洋的思索の限界を鋭く批判したことで知られる。こうした限界の打開策としてドゥルーズは、西洋思想を古典にまでさかのぼり吟味しつつも、東洋思想にも目を向ける。著者は、ドゥルーズが東西の思想を二つの異質な実体としてではなく、有機的に共存しうる思索としてとらえていることに注目し、かれの思想によってこそ、アール・ブリュットをめぐる概念論争への解決策がみいだせるだけでなく、西洋と日本との異なる受け止め方を建設的に批判する基盤が提供されうると主張する。

第4章はヨーロッパにおけるアール・ブリュット概念の誕生をその前史に遡ってトレースし、それが西洋社会に定着する過程を描く。アール・ブリュットは、社会の外部に位置する人間が、衝動に駆られ生みだす感覚の産物として認識された。しかしそもそも社会の外部とは、存在論的に固定しうるものではなく、社会的な産物である。ミシェル・フーコーは、狂気や精神障害への認識が、理性に依存する近代社会の誕生と並行して展開してきたこと、すなわち、アウトサイダーへの認識は、西洋においては近代社会と共に生まれ固定化されてきたことを指摘した。その背後には、近代社会が感性に関わるすべてを、利益と効率を追求する資本主義にとって不都合なものとして抑圧してきた歴史がある。研究は、こうした事情を踏まえ、アール・ブリュットを疎外者の狂気という感性の産物としてだけでなく、現代社会において感性そのものが抑圧されてきた枠組みのなかで、アール・ブリュットを再評価する必要性を提唱する。

第5章は主に英語圏での展開を論じるもので、アール・ブリュットがアウトサイダー・アートと英訳された上で商業化への加速が進展したことを批判的に述べる。アウトサイダー・アートとしての芸術市場がアメリカを中心とした英語圏で認められるようになると、アール・ブリュットにとりプラスとマイナスとなる現象が生じた。まずプラス面は、さまざまな意味で社会から疎外された人間が生みだす芸術というジャンルが、従来の芸術ヘゲモニーの束縛から解放されたかたちで社会的認識を得たことにある。しかしこれはまた同時に、何をもってアウトサイダー・アートと認めるか否かへの判断基準をもつ批評家の権威化を生みだし、それがまた同時にアール・ブリュットそのものの可能性を狭め、その商品化につながるというマイナス面をもたらした。

第6章は日本におけるアール・ブリュットの展開を論じる。障害者の支援や社会参加という意味合

論文審査の結果の要旨

いが強い日本においてアール・ブリュットは、過度な商業化は避けられており、また近年ボーダーレス・アートとして独自の展開も見せている。西洋における一般的傾向とは異なり、日本におけるアール・ブリュットは、まずはエーブル・アート（Able Art）の一環として受け入れられた。エーブル・アートは、芸術活動により精神障害を負う人びとの収入と自尊心を確保すると同時に、社会のなかに取り込む運動である。アール・ブリュットを福祉の一環とみなす日本の受容形態は、アール・ブリュットの担い手であるスキゾフレニックな対象の範囲を狭める危険がある。しかし近年、日本においては、精神障害を負うものと健常者を分け隔てなく奨励するボーダーレス・アートという運動が起きている。この運動が注目に値する理由は、作品そのものよりも作品が生まれるプロセス、とりわけ作品の創り手と鑑賞者の交流に重きを置いていることと、作品を消費市場に送り出すことに制限的である姿勢にある。資本市場への商品化を回避しつつ、社会のなかに取り込む試みが行われている意味で、日本におけるアール・ブリュットの受容は、ドゥルーズが提唱した「反-実現」に極めて近い形態とみなせる。

第7章は結論として前章までの70年間にわたるアール・ブリュットをめぐる議論を総括する。アール・ブリュットは、ヨーロッパ、アメリカ、日本それぞれにおいて、独自の芸術形態として、資本市場で消費される商品として、社会に取り込む手段としてなど、さまざまな受容形態を見せてきた。それぞれが独自の問題を抱えるなか、ボーダーレス・アートに代表される日本におけるアール・ブリュット受容の背景には、社会から疎外されがちな人びとにその居場所を提供する伝統と、結果よりもプロセスを重視するという日本の文化的性格に根ざした特徴がみられる。本研究により初めて認識可能となった日本のアール・ブリュットがもつ可能性と限界については、将来日本人研究者によるさらなる考察が必要である展望が述べられ、本研究は締めくくられている。

本論文の内容の一部は、学術論文および電子書籍として公開されている。

2. 評価

本論文は以下のように学術的に評価できる点を含んでいる。

(1) 東洋思想を取り込むことで西洋近代を批判したドゥルーズの思想を視座に据えることにより、日本におけるアール・ブリュットの受容形態が西洋人にも理解可能になることを、理論分析を通し主張することで、アール・ブリュットをめぐる錯綜した議論に一貫した道筋を与える研究となっている。昨今アール・ブリュット概念が混迷を深め、問題点は指摘されるものの、包括的な見通しには乏しかった議論に、本研究は、日本の事例をも組み込みながら、批判的かつ統一的な把握を行なった点で、高く評価される。

(2) 日本におけるアール・ブリュットが、西洋の視点からみて特異な形態を見せていることに当初から着目し、その原因を解明すべく、アール・ブリュットを実践する現場に直接赴き数多くの関係者、アーティスト、研究者等に直接会い、聞き取り調査を行うと併に、西洋のアール・ブリュット作品と日本のそれとを並べてみせる展覧会やトークイベントを開催するなどの行為を重ね、実証的なデータを得た。それに基づき、日本におけるアール・ブリュットの可能性と共にその限界についても、初めて明確な展望を示した研究といえる。

論文審査の結果の要旨

ただし、以下のような不十分な点も指摘された。

日本におけるアール・ブリュットの展開と受容に関して、フィールドワークのデータをより積極的に用いることが可能だったのではないかと。著者は様々な関係者と面談しており、詳細に記録を組み込めばいっそう臨場感のある研究になったのではないかとと思われる。

もっとも、これは本研究の博士論文としての価値を損なうものではなく、今後の研究課題として克服が期待されるものである。

3. 結論

以上の評価に基づき、審査員一同は一致して、本論文を博士（国際開発学）の学位を授与するに値するものと判定した。